



一見普通の住宅に見えるが、手すりの看板やクレープ販売のカウンターが内と外の距離感を縮めている

南区中村町で子育てサークルの活動をしていた津ノ井さん、根島さん、吉永さんは、近隣のケアプラザで開催したイベントで高齢者にグッズを作ってもらったり、子どもたちが高齢者とふれあう姿を見て、多世代がつながる面白さを感じていました。そして、イベントの時だけでなく、日常的に子どもと高齢者が交流できる場があればと考えるようになりました。「子育てにはお金も必要！子育てを優先しつつ

整備事例 3

世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)

子どもと高齢者が交流する日常「おもいやりハウス」

つ、地域を見守り働ける場所がほしい。地域にないなら自分たちでつくろう！とおもいやり隊を結成します。中村町周辺は坂が多く、高齢化も進んでいて、買い物に困っている人が多くいます。そういう人たちのために販売会をやってみたら？」というアドバイスを受け、買い物難民が多い坂の上の地区で平成30年2月から、定期的に野菜やパンを販売するマルシェを始めました。利用者も多く、「もっと色々な商品がほしい」という声を受け、買い物代行も始めます。活動が軌道に乗ると「地域住民の交流拠点が欲しい」という思いが強くなっていきました。そんな時に、地域ケアプラザで行われた勉強会でまち普請を知り、「私たちにぴったりの制度だ！」と、すぐに応募することを決めます。

多世代が集う「銭湯」でマルシェを行うことで、地域のつながりを豊かにするというアイデアは二次コンテストを通過しますが、計画が具体化する中で様々な課題が顕在化し、別の場所を探



改修もできる場所は自分たちの手で行った

すことになりました。地域の空き家を探し回り新たに見つけた場所も、検討を進める中で断念せざるを得なくなりました。ほぼ諦めかけていたところ、地域の人の協力もあり、二次コンテストの直前によく場所が見つかりました。

しかし、やっこの思いで見つけた空き家は耐震性に問題がありました。そこで耐震工事の資金を集めるために、おもいやり隊はクラウドファンディング※1にチャレンジします。ちょうど横浜が、地域まちづくり活動を対象としたクラウドファンディングの活用支援事業(試行)を立ち上げたタイミングで、その第1号として支援を受けることが決まりました。当初は資金が集まるか不安もありましたが、銀行からの融資や他の助成金を申請する計画も合わせて提案し、無事二次コンテストを通過することができました。

地元からの寄付やクラウドファン



酵素講座の様子。地域の起業家の利用も増えており、応援し合う関係になっている

に協力してくれました。その他にも地域の企業との連携や、協賛という形で応援も生まれています。また、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)※2も実施することで、地域の民生委員さんが足しげくやってきて、カフェを宣伝してくれています。西口にあった鶴見ふれあい館を利用していた高齢者も23Ocafeに来てくれるようになりました。色々な人たちが、23Ocafeを紹介しつながら始めています。

23Ocafeは何かを始めたい人に場所の提供もしています。ビルの前に掲げていた看板を見て、「酵素、づくり」で起業した人が酵素の講座を始めました。その姿を見て、23Ocafeを使いたいという声も他にも寄せら



DIYワークショップの様子。子どもも参加して棚などを手作りした

の後、二次コンテストに向けて地域との連携や近隣商店街での街頭インタビューを積極的に行い、メンバーが一丸となって提案内容を深めていったことで、見事二次コンテストも通過しました。しかし、通過した後には待ち受けていたのが、活動の担い手の離脱です。一緒に活動していた若いメンバーが就職したり、別の活動を始めてしまったこと、須田さんと福徳さんは再度、一緒に活動するメンバーを探すことになりました。ビルが建設され、実際に整備に動き出すまでの期間を利用して、関わってくれる人を再び集め、整備計画や事業運営を急ピッチで検討し、遂に令和2年3月に23Ocafeは完成を迎えました。



ところが、カフェのオープンを目前にして、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化します。カフェのテーブルなどを手作りするワークショップは開催できませんでしたが、その後は全くイベントができなくなり、当初予定していた事業も見合わせることになりました。どうやってカフェを維持していけばいいのか、二人は頭を抱えます。

そんな活動ができない中でも、23Ocafeを地域貢献の活動拠点として活用することになっていたパルシステム神奈川ゆめコープがカフェの維持



れています。地域に拠点ができ、実際に使われることで自分の可能性を見つげることができる、そんな良い循環が生まれ、23Ocafeから新しい風が吹き始めています。

「アイデアはどんどんたまっていく。動けるようになったら、色々仕掛けていきたい」と語るお二人。23Ocafeが今後どんな風を吹かせてくれるのか、期待が高まります。

※2.ボランティアを始めとした地域住民が、要支援者を対象とした介護予防・生活支援の活動を行う場合に、その活動に係る費用に対して補助金を交付する制度。

らに人伝で大工さんや電気屋さん個別に掛けあい、メンバーも工事に参加するなど、何とか整備費用を抑えました。そんな苦労を乗り越え、令和元年10月に多世代交流拠点「おもいやりハウス」が完成します。

おもいやりハウスでは、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)で高齢者向けのサービスの提供したり、お弁当や駄菓子の販売を行い、大人も子どもも気軽に立ち寄れる工夫をしています。友達のお母さんが運営しているという安心感から、放課後は多くの子どもたちが集まる居場所になり始めていました。

しかし、日常的に高齢者と子どもが交流する理想の場所が出来上がった矢先に、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、おもいやりハウスは令和2年4月から2か月間休業することになります。二次コンテストからおもいやりハウスのオープンを挟んでずっと走りつづけてきた。2か月間休業し立ち止まったことで、おもいやりハウスが地域に何を生み出せるのか改めて考えるきっかけになった」と津ノ井さんたちは教えてくれました。「コロナ禍が続く中、お弁当の販売から活動を再開して、さらにフードパントリー※4

「休業中にいろんなアイデアも生まれている。そのアイデアを実現していくためには、おもしろいハウスを持続させること。その鍵は資金面も含めて運営を軌道に乗せていくことにある」。休業期間中にためたパワーとアイデアをもって、次のステップへと進んでいくおもしろい隊。その中心メンバーには中村町で生まれ育った根っからの地元民がいます。地域の中では圧倒的に若手ですが、周りの人たちの期待は大きく、温かく見守られながら、おもしろいやり隊はこの先の未来を見ています。

(おもしろいやり隊は令和元年5月に法人格を取得し、現在はNPO法人おもしろいやりカンパニーとして活動しています)



子どもだけでも親子連れでもふらっと立ち寄れる場所に。コロナ禍明けが待ち遠しい

※3: Crowd(人々、一般大衆)とFundings(資金調達)を合わせた造語で、個人や企業、その他の機関が、インターネットを介してアイデアやプロジェクトを紹介し、それに共感し、賛同する一般の人から広く資金を集める仕組みのこと。

※4: 様々な理由で生活に困っている人々に、無料で食料品などを配付する支援活動。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、十分に食事をとることができない人々が増えたことで、この活動に取り組む人たちも増えた。

世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)

整備主体: おもしろいやり隊
 整備場所: 南区中村町2丁目124番地5
 整備内容: 交流拠点(空き家の改修)
 竣工時期: 令和元年10月



体し、その保管場所を探しました。保管場所を提供してくれたのは、これまでグループの活動を見ていた地域の方でした。まち普請に挑戦する前から、地域の中で多様な活動をしてきたことが力を発揮したのです。

すぐに次の整備場所を探しますが、なかなか条件に合う場所が見つかりません。しかし、解体から2年が経過した頃、ついに空き家を活用してコミュニティカフェをはじめめる団体が、熊野の森もろおかスタイルの活動に賛同し、カフェの庭を提供してくれることになりました。幸いにもDIYで整備したものが多かったため、新たな場所への移設作業も自分たちで協力して行い、令和2年1月にお披露目の会が催されました。最初に作りたかった畑の中の拠点ではありませんが、近くにある師岡町梅の丘公園市民農園と合わせてエコステーションの活動を行なっています。

お披露目会後に、新型コロナウイルス感染症が拡大し始めますが、屋外活動は比較的影響が少なく、親子連れの参加が増えたそうです。「子どもにも自然とかかわる機会を持たせたかった」、「こいつい場所を求めていた」という参

整備事例 4

太陽とコミュニティで
 耕すもろおか
 エコステーション(港北区)
 事業初の整備後の退去を乗り越えた、
 地域の絆のステーション

熊野の森もろおかスタイルは、東日本大震災を契機に、港北区師岡地区で、地域でエネルギーやコミュニティについて考えようと立ち上がったグループ



移設後のお披露目会の様子。コミュニティカフェでの利用も期待される

です。最初は市民共同発電所をつくらうと座学を中心に活動をしていましたが、実際に身体を動かすことも必要と考え、地域の畑を借りて、育てた収穫物をエコストーブ※5やソーラークッカー※6を使って調理するなど、災害時に地域で最低限の生活ができるよう経験を重ねていました。また、地域のつながりづくりのために、地元の高校の落語部と一緒に寄席を開いたり、野外での映画観賞会を開催したりしていました。様々な取組を通してエネルギー・コミュニティ・農・防災を軸に活動が広がっていく中で、「拠点があればもっとできることが増えるだろう」と考えたメンバーは、まち普請への応募を決めます。

まち普請のコンテストに向けて活動するうちに、メンバーはさらに増えていきました。町内会からの後押しも

もっと増やそう、「畑を増やさないと」という話も出てきており、さらには養蜂も始めるそうです。熊野の森もろおかスタイルの今後の展開にますます期待が高まります。

※5: 少量の燃料で高い火力を生み出すことができる燃焼効率の高いストーブ。別名ロケットストーブ。
 ※6: 太陽光を利用して調理を行う器具。

太陽とコミュニティで耕す
 もろおかエコステーション(港北区)
 整備主体: 熊野の森もろおかスタイル
 整備場所: 港北区師岡町600
 整備内容: 交流拠点(パーゴラ、ベンチ等の製作)
 竣工時期: 令和2年1月
 (平成30年1月に竣工後一度撤去)



畑作業やエコストーブなどの実践は梅の丘公園で継続して行われている

加者の声も多く届いているとのこと。「たくさんの親子連れや様々な世代の人が畑仕事をするのを見ていて、こういう場所をつくってよかったと思う。」口ナによって、たくさんの気づきがありました」と代表の肥後さんは語りま

す。完成直前で移転を余儀なくされるというハードルを乗り越えて、熊野の森もろおかスタイルの活動は着実に地域に根を下ろし、すそ野を広げています。「親子連れで参加できるメニューを